



paper

SPECIAL
ISSUE



photo: Yoshiro Masuda



SPECIAL TALK

服部滋樹 × 木ノ下智恵子 × 塩山諒
(graf 代表) (アートプロデューサー) (スマスタ代表)



監修：おおさか創造千島財団
吉澤弥生 (recip 理事)



Co.to.hana
dot architects



水野祐 (弁護士)
芦立さやか (HAPS 事務局長)



津田和俊
(研究者)



服部滋樹 × 木ノ下智恵子 × 塩山諒

(graf代表)

(アートプロデューサー)

(スマスタ代表)

“これからの支援”を探る特別座談会。デザイン的思考で家具づくりから産地再生などの地域活動まで幅広く活動するgraf代表・服部滋樹氏、またアーティストと研究者、企業やNPOをつなぎ、アートの可能性を拡張してゆくプロデューサー・木ノ下智恵子氏。さらに、就労支援の新しいかたちを構想、実践するスマスタ代表・塩山諒氏。関西を拠点に、クリエイティブと人の関係性を見つめる3人からお話を聞いた。

美学と価値基準をもつこと

服部: 僕と木ノ下さんは、おおさか創造千島財団(以下、財団)の助成選考委員として4年間、助成の審査に携わってきました。塩山さんも分野は異なりますが、就労支援の活動をされていますよね。

塩山: はい。僕たちは、2013年から就労支援活動をスタートし、その拠点として「ハローライフ」を西区本町に立ち上げました。ここでは「支援」を、本人の努力による「自助」、地域のコミュニティや周辺の人による「共助」、生活保護や働くために必要な支援として行政が提案する「公助」と3つの要素に分けて考えています。その行政・地域・民間からの資本をバランスよく導入し、持続可能な仕組みをつくるのが目標ですね。また、「支援」という言葉さえ使わずに、就労を助ける場・コンテンツを生み出そうと実践しています。

木ノ下: たしかに「支援」という言葉は、上から目線のような印象がありますね。私自身は手がけるプロジェクトにおいても、常にWin-Winの関係でありたいし、支援をしているという想いはもったことがないんです。本来的には、“社会をどう良くするか”といった大文字の目標ではなく、お互いに必要なものを共有していく関係の方が持続する可能性は高いと思います。現場で活動するなかでも、ポジティブな言葉や語りからこぼれ落ちていくものを、きちんと芸術文化として醸成していく環境づくりに興味がありますね。

服部: 僕も「応援したい!」と思うのは、超パーソナルなおもろい人たち。プレイクスルーのきっかけに立ち会えるかもしれない可能性にドキドキするし、その感情こそ原動力でもあります。

木ノ下: 当たり前のことだけど、実は大事な感覚ですね。“言語化はできないけれどグッとくるもの”に惹かれて、そこに何か手を差し出したい欲望が、本来のモチベーションのはずですから。

服部: 例えばクラウドファウンディングも、参加したいけれどできない人が、お金という形で参加表明をする仕組みだと思います。

木ノ下: “参加表明＝共犯者”になれる仕組みですね。そう考える

と、「支援」という言葉の意味に代わる仕組みづくりとコンセプトを打ち出すことができれば、すごく意義があると思いますね。世の中が見向きもしなくても、独自の観点で共感し、“想いの投資”をしていく、そんな美学と価値基準で動く組織や仕組みがあれば、ありがたい。

塩山: “想いの投資”という視点はとても大事だと思います。ただ行政や企業からすると、お金以外のリターンを想定して事業を立ち上げることはとても難しいですよ。

木ノ下: たしかに。ただ私は、財団にはそれが許されるような、ある種の余白をもってほしいなと思うんです。「おもしろいからやったらいいんじゃない?」と同意することや「自分もそこに噛んでいきたい!」と関わっていくことが大事で。幸い、財団の母体は、大阪で100年以上の歴史がある不動産会社・千島土地です。なので、「活動を通して、土地の価値が上がる」という見込み、それがリターンととらえることもできるかもしれません。名村造船所大阪工場跡地^{*1}や旧千島文化住宅^{*2}を残していることに顕著ですが、企業を誘致するような短期投資をしないところに、ある種の余白が見えます。

川上から川下、制度から人へ

服部: grafの取り組みである、一次産業とユーザーをつなぐ参加型マルシェ「FANTASTIC MARKET」や香川県・小豆島を舞台としたリサーチプロジェクト「カタチラボ」など、市民の方との協働を通して考えるきっかけをもらうことがあります。行政は、住民の暮らしに直結したことよりは、少し離れたところにある仕組みの整備が得意です。だから民間のクリエイターや塩山さんのような人たちが、住民目線で仕組みを構成し、行政に対してわかりやすく言語化する。そういう作業が、いま各地で起こっているんですよ。また美術館や博物館でもコミュニケーターがいて、これまでキュレーターだけでは難しかった“市民との間をつなぐ”役割を担っている。ハード



ルを下げながら、関心のない人たちにも興味を広げる方法が必要になってきていると思います。

木ノ下: そうですね。だけど、ここで間違えてはいけないのが、展覧会やアートプロジェクト、映画など作品と呼ばれるもののハードルを下げる必要は一切ないということです。観る人を馬鹿にしていけない。重要なのは、作品ではなく“関わり方のハードル”を長期的なビジョンに基づいて設定することです。

服部: そういった活動が行われてこなかったのは、たぶん、ここ20~30年で言われている、批評家・ジャーナリスト不在が要因のひとつでもあると思います。つまり、彼らがいれば可視化されたはずのものが、見えないままに長い月日が流れてきたんです。すると、判断する基準もつくりられないまま、市民と専門家の距離が一層遠ざかってゆき、さまざまな問題の可視化も遅延されてしまう。

木ノ下: アートやデザインの分野では、もの見方や文脈をつくる意味で、批評性が重要です。しかし、結局「いいね!」とボタンさえ押せばOKで、対象を語るボキャブラリーが少なくなってきていますよね。白と黒しかなく、間にあるグラデーションのようなさまざまな言葉が語られなくなってしまったことに危機感を覚えています。

服部: そう思いますね。4年間、財団の助成選考委員を務めてきた経験からも、助成事業においても作家の間口を広げるため、何らかのハードルを下げる必要があると感じています。

木ノ下: ただ、大きい組織や行政が、個の想いを極力排除し、大義名分で“いかに正しいか”という貧しい基準しかもたない現状において、クラウドファンディング的な、“個人の想いの共感”を重視している財団の活動はとても意義深いことです。

塩山: ただクラウドファンディングも、ある程度文章が書けないとお金が集まってこない、というハードルはあります。財団の活動を評価するからこそ、新しい審査のかたちや基準を模索し、財団でできない支援を行ってみたいですね。規制や前提を破壊すれば、新たな支援のあり方が見えてくるかもしれない。

木ノ下: 私もそう思います。もう少しトライアルの機能をもたせて「私はこういう想いでやってます! ぜんぜん書けないけど!」という人にも間口を広げる。例えば、年間50万円の助成が10本あるとしたら、その1本を5万円ずつ10組に助成するなど……、支援の仕組みにおけるクリエイティビティを見せてほしいですね。

服部: そのためには、助成の選考委員や組織の形態自体も一度考え直す必要があるかもしれませんね。

塩山: 組織の形態を考え直すのは、とても重要なことだと思います。サービスの質が悪いと批判を受けたりした場合、よくよく突き詰めると、その運用や組織自体の仕組みとして持続性が担保されていないところに問題があったりする。だから、業務もアップデートされず、結果、サービスの質が落ちるなんてことよくありますね。

木ノ下: 私も最近、特に事務局のクリエイティビティやマネジメントスタッフのスキルの重要性を感じています。キュレーターやディレクター、デザイナーになりたい人はたくさんいるけれど、そのすべてを含めてどう動かすかを構想設計と実践をできる人は少ない。

服部: プロジェクトマネジメントできる人材がいないですね。

木ノ下: そうです。プロジェクトマネージャー、あるいは事務局スタッフの仕事をきちんと評価し直して、社会や組織のなかで位置付けることが、どの業界でも必要になってきていると思います。

支援の豊かなバリエーション

服部: 支援する側の状態がどう変わるべきか話したいのですが、塩山さんたちのハローライフは、ハローワークの取り組みに対して、実際どんなサービスを展開しているんですか?

塩山: 僕たちはハローワークと同じく、働くことや仕事に関する情報と機会の提供を行っています。ハローライフを利用する方の目的はさまざまで、建物の1階には職業観醸成につながる本が並ぶライ

ブラリ空間と日本茶カフェがあります。そこでは本を読む以外に、お茶を飲みながら作業ができるようにしています。2階ではワークコーディネーターが常駐し、求人情報からマッチングに至るまでのサービスを提供。3階はギャラリー・イベントスペース。4階まで上がるとカフェで提供しているフードを製造するファクトリーがあり、就労体験も実施しています。理想としては、図書館のように公共性の高いものをイメージして、利用者が支援されている感覚をもたず過ごせるように、仕組みやコンテンツをつくっています。

木ノ下: それってすごく面倒臭いけれど、とても丁寧に豊かな支援の方法だと思います。世の中、多様な尺度があったほうがいい。

塩山: たしかに行政のほうが早道で、就職することが目的であるハロー“ワーク”に対して、ハロー“ライフ”は生きることを目的にしています。どんな仕事を通して、どうやって理想の暮らしを実現するのか。今の時代「働けたらそれでいい」人は少なく、みんな「よりよく働きたい」と思っています。だとすれば、仕事を探すことと、人の暮らし・人生をセットで考えることは必然だと思います。

木ノ下: つまり営為の多様性を表現しているのが、ハローライフの活動だと思います。本来“働くこと”には、企業の終身雇用だけではなく、自ら考えて仕事をつくることで、さまざまなバリエーションがあるはず。これからは「支援」という言葉をもう少し解体して、多面的にどう設計できるかが課題となるでしょうね。そのためには組織内部の構造がとても重要になってきます。

服部: でも、どこの組織も、とても少ないメンバーで運営していますよね。大規模になる必要はないかもしれないけれど、支援する側も支援を受けたり、ほかの組織や団体と連携し賛同を得たりして、スキルを上げ、新しい方向性も視野に入れるべきだと思いますね。そうすることでサービス自体が変わってくるはず。

木ノ下: なるほど、バックヤードから変えていくわけですね。

服部: そう。さまざまな人材が財団と関わり、バックヤードが豊かになれば自ずとアウトプットにも広がりが見られる。

木ノ下: 名村造船所大阪工場跡地における活動も10年目になり、ほかにも大型の美術作品を収蔵した倉庫MASK^(*)など、財団の資産もさまざまな広がりが出てきています。財団内部の仕組みを醸成していくために、推進力となるエンジンを——つまり、人材や環境をどう整備していくかが今後の課題かもしれません。

塩山: 既存の枠組みにとらわれない、柔軟さや余白自体が財団のエンジンでありアイデンティティだと、お話のなかで感じました。

木ノ下: そうですね。あとは、北加賀屋にまだ使い切れていない資産としての場所と建物があるから、それをディレクションして活用することも具体的な課題でしょう。例えば、現在プロジェクトが動きつつある旧千鳥文化住宅の空間をさらにおもしろくしてくれる人を1室ずつキュレーションしていくとか。

塩山: 芸術やスポーツの分野もそうですが、こういった活動はすぐに見返りがあるわけではありません。けれど、地域コミュニティや防災のセーフティネット同様なくてはならないもので、さまざまなものやことが円滑に動く上で必要なファクターのひとつでもある。それをどう見極めて資産化、活用していくのか、今後も問われていますね。

※1

名村造船所大阪工場跡地
大阪市住之江区北加賀屋 4-1-55



1988年、名村造船所大阪工場跡地の土地が千鳥土地株式会社へ返還され、2005年に、その広大な敷地をクリエイティブな活動に活用するため、CCO（クリエイティブセンター大阪）を開設。さまざまな「クリエイション」と「コミュニケーション」のための実際場の場となっている。

※2

旧千鳥文化住宅

大阪市住之江区北加賀屋 5-2-28



造船所全盛時代に大量の労働者が移住するも、時代とともに居住者が減少し、廃墟同然となっている建物。現在、建物の構造を調査しながら活用方法の検討が進められ、今後は隣接する「北加賀屋みんなのうえん」と関連させながら、サードプレイスとしてのあり方が模索されている。

※3

MASK

(MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA)
大阪市住之江区北加賀屋 5-4-48



鋼材加工工場・倉庫跡の空間を再生し、現代美術作家の大型作品を無償で保管・展示しているスペース。2014年に開催された「Open Storage 2014 - 見せる収蔵庫 -」では、国際的に活躍する現代美術作家5名の大型作品が一般公開され、大きな話題に。2015年秋にも、展示公開を予定。

服部滋樹

Shigeki Hattori

1970年生まれ。graf代表、クリエイティブディレクター、デザイナー、建築、インテリアなどに関わるデザインや、ブランディングなどを手掛け、産地再生などの地域活動にもその能力を発揮している。京造形芸術大学芸術学部情報デザイン学科教授。

木ノ下智恵子

Chieko Kinoshita

1971年生まれ。アートプロデューサー。活動は、現代美術家の個展、アートマネジメント講座、都市のアートプロジェクトなど、多岐に渡る。近年の事業・活動に「NAMURA ART MEETING '04-'34」、「水都大阪2009「ヤノベケンジプロジェクト」」などがある。

塩山諒

Ryo Shioyama

1984年生まれ。小学校3年生から不登校、ひきこもりを経験。さまざまな人との出会いを通して、2008年にNPO法人「THE SOCIAL DESIGN COMPANY スマスタ」を設立。公共、企業、教育、3つの領域においてソーシャルデザインの研究と実践に取り組む。

おおさか創造千鳥財団(CFCO)について



おおさか創造千鳥財団

大阪・北加賀屋を拠点とする千鳥土地が、株式会社設立100周年を機に、自らもつ資源をもとに大阪のクリエイティブな活動をサポートする、おおさか創造千鳥財団を設立しました。アーティストやクリエイター、日々創造的活動を続ける人たちとともに、関西の芸術・文化の発展を支え、地域の新たな価値を見いだすこと、そして、多様な文化が許容・醸成される豊かな地域社会をつくり出すことを目的として活動しています。

URL <http://www.chishimatochi.info/found/>

事業内容

1. 助成事業

大阪の創造環境の向上、アーティストやクリエイターが活動しやすい状況を整備し、また創造性が触発されるような環境を生み出すことを目指し、3つの助成プログラムを実施しています。

創造活動助成(公募)

大阪を拠点とするアーティスト・団体の国内外における活動と、大阪で行われる創造活動に対して助成金を交付。

スペース助成(公募)

造船所跡地を改装した創造スペース「クリエイティブセンター大阪(CCO)」を創造活動の舞台として無償で提供し、助成金も交付。

パートナーシップ助成(非公募)

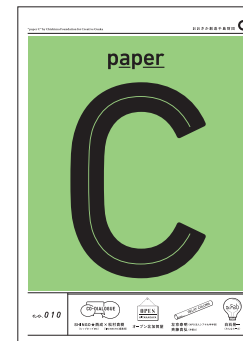
財団の所在地である、大阪市・北加賀屋で活動するアート関係者などと連携し、活動資金の一部を助成金として交付。

これまでの公募助成実績

年度	2012	2013	2014	2015
創造活動助成	採択 16件 / 申請 181件	採択 11件 / 申請 68件	採択 11件 / 申請 82件	採択 11件 / 申請 120件
スペース助成	採択 4件 / 申請 42件	採択 4件 / 申請 13件	採択 4件 / 申請 21件	採択 5件 / 申請 31件

2. 機関誌「paper C」発行

大阪からアートやクリエイティブの情報を発信するフリーペーパー「paperC」を2012年より年3回刊行しています。財団の活動報告や助成情報のみならず、活動領域の異なるクリエイターや研究者による巻頭対談、まちづくりをテーマとしたリレーコラムなどの読み物記事を中心に構成。誌面を通して、財団の目指すビジョンとともに考え、共有できるようなメディアとなっています。1年ごとにコンテンツを更新。現在までにvol.001～010を発行。全国の主要な文化施設、公共施設などで配布しています。



※バックナンバーのPDFは、以下URLよりダウンロードいただけます。
http://www.chishimatochi.info/found/?post_type=letter

3. 北加賀屋における創造環境整備

2009年に提唱された、北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想^{*}をもとに、所在地である大阪市・北加賀屋エリアでMASKを運営するとともに、アーティストやクリエイターが北加賀屋で行うイベントやクリエイティブ拠点について、またクリエイター向け物件などの多彩な情報を発信しています。

※北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ(KCV)構想
大阪港につながる木津川沿いの名村造船所大阪工場跡地を中心に、大阪・北加賀屋エリアに点在する空き物件や空き地で、アーティストやクリエイターがアトリエやオフィスなどを開設・運営し、一帯を「芸術・文化が集積する創造拠点」として再生することを目指している。



photo: tuki Moriya

助成交付団体の声

Q & A

おおさか創造千島財団がこれまでに助成を行った、さまざまな領域のアーティスト、クリエイター、団体へアンケートを実施。北加賀屋・大阪・関西で活動すること、そして財団の活動について振り返ります。
※いただいた回答のうち3つを抜粋し、掲載しています。



特定非営利活動法人
こえとことばとこころの部屋
代表理事 **上田 假奈代 さん**

A1 大阪をめぐる文化芸術活動の底上げを担おうとする心意気を感じます。**A2** ヨコトリ2014にて「TAKIDASHIカフェ」を実施。釜ヶ崎の知恵・手法を横浜で発表することができました。創意工夫することを「生存のアート」と位置づけたことに意味を感じています。**A4** (自戒をこめて) 井戸のなかに気づかない人と、社会を考える人の両方がいる。大阪は状況が厳しいから、活動と社会的意義について考えている人は多いと思います。

2014 / 2015年度 創造活動助成

特定非営利活動法人
こえとことばとこころの部屋

2003年新世界フェスティバルゲートで活動開始。表現と社会の関わりを探る。2004年10月NPO法人化。2008年1月西成区(通称釜ヶ崎)に拠点を移し、喫茶店のふりをつける。2012年から地域のさまざまな施設を会場に「釜ヶ崎芸術大学」をひらく。



▲釜ヶ崎芸術大学inヨコハマトリエンナーレ2014



演劇ユニット
鳥公園
主宰 **西尾 佳織 さん**

A2 サイトスペシフィックな作品づくりという点で達成を感じることができ、課題・進むべき方向が見えました。**A4** 子供鉦人のさよならパーティーに参加して、劇団の愛され方に衝撃を受けました。羨ましい反面、観客との近さ・狭さ・親しさは難しい。しかし関西のビジネスライクでない感じは魅力的。**A5** AIR大阪近くのお好み焼き屋さんで、初めてのなかに「いつもありがとうね〜」的接客をされた、そういういい加減な愛想の良さ。

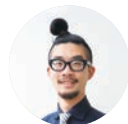
2014年度 スペース助成

演劇ユニット
鳥公園

2007年結成。「正しさ」から外れながらも確かに存在するものたちに、少しボケた角度から、柔らかな光を当てようと試みている。「存在してしまっていること」にどこまでも付き合おうとする演出が特徴。「カンロ」が第58回岸田國士戯曲賞最終候補作にノミネート。



▲鳥公園#10「空色の色はなにいろか?」工程1



劇団
子供鉦人
代表 **益山 貴司 さん**

A1 活動について意見交換し、活動後のヒアリングでは未来の話ができ、信頼し合えるパートナーだと強く思いました。**A3** 一般の人々の観客を増やすことです。演劇ファンの方々以外にも情報宣伝を積極的に行い、広くお客様を増やしたいと考えています。**A5** 北加賀屋には、大人が童心に帰って遊べるフィールドがあります。これからも自分の友だちにオススメできる、楽しいまちであってほしいと思います。

2012 / 2014年度 創造活動助成

劇団
子供鉦人

2005年大阪で結成。関西タテノリ系のテンションと骨太な物語の合わせ技イッポン劇団。人間存在のほかほかしさもどかしさをシュールでファンタジックな設定で練り上げ、黒い笑いをまぶして焼き上げる。2014年TOKYOに拠点を移し2015年めでたく10周年!



▲クルージングアドベンチャー3



編集プロダクション
LLC インセクト
編集部 **有佐 和也 さん**

A2 雑誌の発行の後押しになったこと。また、発行記念イベント「Caravan from Osaka」を行い、全国各地のローカルなエリアでの活動も視野に入れることができました。**A3** これからも定期的に雑誌を発行するにあたり、流通・販売についてベストな形を模索しているところです。**A5** 顔の見える関係性が築けるところが魅力だと思います。あと、インターネットでは探し出せない、北加賀屋ならではの店がたくさんあります。

2012 / 2014年度 創造活動助成

編集プロダクション
LLC インセクト

谷町6丁目発ローカルカルチャー雑誌「IN/SECTS」を刊行する編集プロダクション。雑誌編集のほか、Webサイトのコンテンツ制作、イベントの企画・運営などを行う。最新号の特集は、「日記」。イベントにアートエリアB1「アパートメント・ワンワンワン」など。



▲アパートメント・ワンワンワン

Q

Q1 財団に期待すること、財団の印象について教えてください。/**Q2** 助成を受けて、その後、どんな発展がありましたか?/**Q3** 活動を行う上で、困っていること、課題はありますか?/**Q4** 関西のクリエイションの状況を、どのように感じていますか?/**Q5** 北加賀屋の魅力について、教えてください。



公益財団法人
日本センチュリー交響楽団
理事長 **水野 武夫 さん**

A1 さまざまな分野を対象に助成をされていて素晴らしいと思います。そして、オーケストラがこの助成を受けたことがとても嬉しいです。21世紀のオーケストラは排他性より多様性が大事だからです。**A2** 新しい音楽をつくりだすこと、専門家以外の人とともに表現できるという認識が広がっています。**A4** 継続や発展のためには、芸術や文化の内外に対して一貫した強い理屈、共通の言葉が必要だと感じます。それは、当団も含めてです。

2014年度 創造活動助成

公益財団法人
日本センチュリー交響楽団

1989年に活動を開始。創立25周年を迎えた2014年には首席指揮者に飯森範親を、首席客演指揮者にアラン・プリバエフを迎え新たなスタートを切った。大阪での定期演奏会、さまざまな地域での特別演奏会のほか、教育プログラムにも力を入れている。



▲スマスタと共同開催のコミュニティ・プログラム



大阪市現代芸術創造事業
Breaker Project
ディレクター **雨森 信 さん**

A1 北加賀屋での活動をモデルケースとしながら、大阪の各地域における独自の活動がゆるやかなネットワークを形成し、さらに発展していくことを期待します。**A2** ほかの助成制度では対象になりにくい改装資金も認められているため、空き家などを活用した事業を始動する一助となりました。**A3** 活動を継続するための安定した資金調達が長年の課題です。地域の企業や他分野との連携も視野に入れ、活動基盤を構築していきたいです。

2012 ~ 2014年度 創造活動助成

大阪市現代芸術創造事業
Breaker Project

2003年より大阪市の文化事業として西成区を拠点に活動する地域密着型アートプロジェクト。アーティストとともに、まちの中に創造の現場を生み出し、地域の人々とさまざまな関わりをつくりながら「芸術と社会の有効な関係」を再構築していく取り組み。



▲創造活動拠点「新・福寿荘」



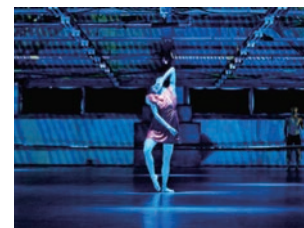
PERFORMANCE ART COLLECTIVE
ANTIBODIES
代表 **東野 祥子 さん**

A2 関西のアンダーグラウンドな現場との接点になり、異なるジャンルのアーティストが交流する場となりました。**A4** ダンスに関しては東京よりは比較的、稽古場を借りやすい状況だと感じます。ただ、発表するためのペースになるような企画や受け入れるホールなどが少ないと思います。**A5** 工場などが点在し、生活エリアでは感じられない空気感で、発表されるアートの質感も大掛かりで変わったものになり得るところ。

2012年度 スペース助成

PERFORMANCE ART COLLECTIVE
ANTIBODIES

2000年、東野祥子を中心に「Dance Company Baby-Q」を結成。ダンサー、ミュージシャンをはじめとして、さまざまなプレイヤーが在籍。舞台芸術からサブカルチャー、現代音楽など多方面での活動を行う。それらの活動をベースに2015年、BINGらとともに設立。



▲Baby-Q公演「感星大接近、しかし衝突せず。」



デザインプロジェクト
DESIGNEAST
実行委員 **水野 大二郎 さん**

A3 日本、世界へと活動のネットワークを広げ維持する仕組みが十全ではないこと。**A4** 20代のクリエイターが活動拠点として関西を選択することが増えているように感じます。大阪のなかで完結するのではなく、世代や職種、地理的条件を超えた交易、交流が促進することに期待。**A5** 未完成かつ流動的な状態を保ちつつ、新しい人材が新しいプロジェクトを展開できるような余地、余白があり続ける「ペータ版のまちづくり」が維持されてきたこと。

2012 / 2014年度 創造活動助成 2012 / 2013年度 スペース助成

デザインプロジェクト
DESIGNEAST

DESIGNEASTは、世界を見つめながら活動するデザイナー、建築家、編集者、研究者の5人が発起人となって生まれたプロジェクトです。賛同者らとの協働による状況の創出とコミュニティの創造を目的に、デザインする状況をデザインすることを目指して活動をしています。



▲DESIGNEAST 05 CAMP in Kyoto

アートサポート・クロニクル

Illustration: Nana Shimada

おおさか創造千島財団設立から3年、近畿圏におけるアートサポートの状況も大きく変化しつつあるいま。現状にふさわしい助成の仕組みを考え、実践するための視座を、これまで民間・行政が行ってきたアートサポート・文化事業を振り返りながら見いだしていきます。

出典：「ネットTAM」<https://www.nettam.jp/timeline/>
「メセナnote」64号 p.8-15 (企業メセナ協議会、2010年)
「メセナ」を知る本」(企業メセナ協議会、2010年)
「大阪アートカウンシル設立に向けた事例調査・フォーラム 開催事業報告書」(2013年)
監修・コメント執筆：おおさか創造千島財団

社会・アートの動向

「日本万国博覧会」開催 / 「著作権法」制定

「国際交流基金」設立 / 「札幌オリンピック」開催 / 沖繩返還協定の発効

第一次オイルショック

ロッキード事件で田中角栄元首相逮捕

日中平和友好条約に調印

旧ソ連がアフガニスタンに侵攻

「本多劇場」開館 / 「美術館連絡協議会」設立

インターネットが誕生 / 「東京ディズニーランド」開園

自治体で文化振興条例制定、文化振興財団設立が相次ぐ

「男女雇用機会均等法」が制定 / 小劇場ブームが指摘される

ブラックマンデー、史上最大規模の株値大暴落となる / サントリー「文化事業部」設置

昭和天皇崩御、平成へ / 北京で天安門事件 / 消費税スタート

「企業メセナ協議会」設立 / 「芸術文化振興基金」創設 / 経団連「1%クラブ」設立

湾岸戦争勃発 / バブル景気の崩壊 / 慶應義塾大学「アート・マネジメント」講座 / 「アート・プロデュース」講座

「文化経済学会」設立 / 文化庁在外研修制度にアートマネジメント部門が加わる

慶應義塾大学「アート・センター」設立 / サッカーJリーグが開幕

「国際文化交流推進協会」設立 / ネルソン・マンデラが南アフリカ共和国初の黒人大統領に / 旧自治省「地域創造」設立

阪神・淡路大震災発生 / オウム真理教により、地下鉄サリン事件発生

文化庁「アートプラン21」開始、「アートのあるまちづくり事業」開始 / 「日本NPOセンター」設立 / トヨタ自動車「トヨタ・アートマネジメント」講座開始

消費税が5%に増税 / 文化庁「アーティスト・イン・レジデンス事業」開始

近畿圏の民間のアートサポートの動き / 近畿圏の文化行政 / 北加賀屋の動き

「兵庫県立近代美術館(現・兵庫県立美術館別館)」開館

日本生命保険ほか「大阪日本民芸館」開館 / 「古郡飛鳥保存財団」設立 (奈良)

大阪府、企画部に「文化振興室」設置

「大阪ニコンサロン」開館 / 「大阪府民ギャラリー」開館

白鷹「阪馬考古資料館」設立(兵庫) / 「ミノルタフォトスペース大阪」開館

「国立国際美術館」開館(大阪) / 「国立民族学博物館」開館(大阪)

神戸風月堂「風月堂ホール」開館(兵庫) / ワコール「京都服飾文化研究財団」設立 / 阪急不動産「オレンジルーム(現・HEPホール)」開館(大阪) / 「兵庫県立尼崎青少年創造劇場」開館

「サントリー文化財団」設立、「サントリー学芸賞」創設(大阪) / 「日本生命財団」設立(大阪)

「大阪府民ギャラリー」が中之島に移転し、「大阪府立現代美術センター」に改称

朝日放送「ザ・シンフォニーホール」開館(大阪) / 「白鹿記念酒蔵博物館」設立(兵庫) / 「財団法人大阪21世紀協会」設立

「野村文華財団」設立(京都)

川島織物セルコン「織物文化館」開館(京都) / 「INAXギャラリー大阪」開館 / 竹中工務店「竹中大工道具館」開館(兵庫) / 「京都オムロン地域協力基金」設立 / 「国立文楽劇場」開館(大阪) / 「岸和田市文化会館マドカドホール」開館(大阪)

朝日放送、近畿日本鉄道「ABCギャラリー」開館(大阪) / 近畿日本鉄道「近鉄劇場」近鉄小劇場「開館(大阪) / 大阪ガス「開町ミュージアムスクエア」開館(大阪) / 「大同生命国際文化基金」設立(大阪) / 「吹田市文化会館(MAY THEATER)」開館(大阪)

ハナホーム兵庫「ギャラリーネルサンス・スクエア」開館(兵庫) / 松竹芸能「浪花座」開館(大阪) / キリンビール「KPOキリンプラザ大阪」開館 / 淡海自動車工業「ブラームスホール」開館(滋賀) / 京都市中央信用金庫「中信美術奨励基金」設立

滋賀銀行「しがきんホール」開館(滋賀) / 近鉄百貨店「近鉄アート館」開館(大阪) / 「アイホール(伊丹市立演劇ホール)」開館(兵庫)

「平和堂財団」設立(滋賀) / 「リそなアジア・オセアニア財団」設立(大阪) / TOA「XEBEC HALL」開館(兵庫) / 出光興産「出光美術館・大阪」開館 / 「奈良そごう美術館」開館 / 「大阪府文化振興財団」設立

第三銀行「三銀ふるさと文化財団」設立(三重) / 住友生命保険「いずみホール」開館(大阪) / 文化振興施策の制定：三重県文化振興ビジョン、向日市文化振興基本計画(京都)

大日本印刷「ddd (DNP DUO DOJIMA)」開館(大阪) / 「ローム・ミュージックファンデーション」設立(京都) / 「岸和田市市民文化事業協会」設立(大阪) / 「みなと銀行文化振興財団」設立(兵庫) / 大阪商工会議所「大阪コミュニティ財団」設立

藤町ミュージアム・スクエアにて若手劇団応援企画「開町アクト・トライアル」開始(大阪) / 近鉄百貨店「秋篠音楽堂」開館(奈良) / 朝日新聞社・阪急電鉄「A&Hホール」開館(大阪) / 「ウイングフィールド」開設(大阪)

「けいはんなプラザホール」開館(京都) / 大阪ガスグループ、開町ミュージアムスクエアの運営において「メセナ賞」受賞(大阪) / 石原産業「イシハラホール」開館(大阪)

「兵庫県立ビビッコロ劇団」設立 / 「宝塚市文化振興財団」設立(兵庫) / 大憲「夢劇場ギャラリー」開館(兵庫) / 神戸近隣のアーティストを中心に「C.A.P.(芸術と計画会議)」設立(兵庫) / 「関西演劇人会議」設立(大阪) / 近畿日本鉄道「松伯美術館」設立(奈良) / 「サントリーミュージアム」(天保山)開館(大阪)

「京都市コンサートホール」開館 / TOA「YEBEC HALL」を中心として行っている音文化啓蒙活動において「メセナ大賞」受賞(兵庫) / あいおいニッセイ同和損害保険「ザ・フェニックスホール」開館(大阪) / 神戸酒心館「酒心館ホール」開館(兵庫)

「アサヒビビール大山崎山荘美術館」開館(京都) / TORII HALL内に「DANCE BOX 実行委員会」設立(大阪) / 「神戸新聞松元ホール」開館(兵庫) / 「神戸新聞文化財団」設立(兵庫) / 「向馬遷太郎記念館」開館(大阪) / 積水ハウス、P&G「神戸まちづくり六甲アライアン」基金」設立(兵庫) / 「ダイキン工業現代美術振興財団」設立(大阪) / 「神戸アートビレージングセンター」開設(兵庫)

「大阪現代舞台芸術協会」設立 / 「大丸ミュージアムKOBÉ」開館(兵庫) / 神戸酒心館「酒心館ギャラリー」開館(兵庫) / 慶典院、劇場寺院として再建(大阪)

～1970年代

民間のアートサポートが文化行政に先行
1970年以降、全国で美術館など公立文化施設の建設が相次いだ。民間の文化施設はそれに先駆けて活動を開始していた。大阪では、逸翁美術館(1957年・阪急電鉄)やフェスティバルホール(1958年・朝日新聞社)などが開館していた。

1980～1989年

企業による文化施設、財団・基金が増
1980年代になると、企業のCI(コーポレート・アイデンティティ)意識の高まりや好景気を追い風に、民間のアートサポートが活発化。後に大阪の文化をけん引する開町ミュージアムスクエアやキリンプラザ大阪が生まれたのもこの頃。



1990年

官民のアートサポートの転換期
1990年に芸術文化振興基金が設立され、国として芸術活動への助成の体制が確立。同年には企業メセナ協議会が誕生し、社会貢献の一環としてのアートサポートという概念が広がったことで、大型文化事業への「冠協賛」から各社の創意工夫による多種多様な取り組みにシフトしていく。

1991年～

アートの担い手側の変化
1991年に日本で初めて大学のアート・マネジメント講座が開講し、アート活動を運営するための手法やアートと社会の関係性に関心が寄せられる。1998年のNPO法制定以降は、アートNPOが新たな文化の担い手として、アートと社会を結びつける活動を展開し、企業メセナとのパートナーシップによる活動も増えていく。



「特定非営利活動促進法(NPO法)」制定／文化庁文化政策推進会議報告「文化振興マスタープラン-文化立国の実現に向けて」発表／「日本アートマネジメント学会」設立／「美術品公開促進法」施行

EUに加入する12カ国でユーロが導入される／ぶらの演劇工房、NPO法人認証第1号／日本NPO学会設立総会／「取手アートプロジェクト」開始

「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」開始／シドニーオリンピックで高橋尚子が女子マラソンで初の金メダル

「文部科学省」発足／「文化審議会」設置／国立博物館、国立美術館、文化財研究所が独立行政法人化／アメリカ同時多発テロ事件発生／「ヨコハマトリエンナーレ」開始／国税庁「認定NPO法人制度」開始(3月28日成立)／「文化芸術振興基本法」施行

文化庁「文化芸術創造プラン(新世紀アーツプラン)」スタート、民間劇場へ支援対象拡大／国税庁「認定NPO法人制度」税制優遇基準を緩和／アサヒビビール「アサヒ・アート・フェスティバル」開始／2003年度(平成15年度)文化庁予算概算要求額が1000億円台に

NPO法人認証数が1万を超過(累計1万89件)／所得税法改正で芸能報酬にかかる「法人源泉徴収(所得税法第174条第10号)」撤廃／第1回アートNPOフォーラム実行委員会「第1回全国アートNPOフォーラム」開催／人形浄瑠璃文楽がユネスコの無形文化遺産に指定／「知的財産基本法」施行、内閣に「知的財産戦略本部」設置

文部科学省「地域づくり支援室」設置、文化庁「文化財国際協力等推進会議」設置、「改正文化財保護法」で文化的景観や民俗技術が文化財に／トヨタ自動車・企業メセナ協議会、アートマネジメント総合サイト「ネットTAM」開設／インドネシアで、スマトラ島沖地震が発生

「改正著作権法」施行／横浜市「創造都市交流事業」開始／文化庁「文化芸術創造プラン」制度変更で団体運営助成が専業助成に／政府税調「新たな非営利法人に関する課税及び香附金規制についての基本的考え方」発表／歌舞伎がユネスコ無形文化遺産に指定

文化庁「NPOによる文化財建造物活用モデル事業」発足／経済同友会が提言「企業が文化になるとき〜文化をベースに企業と社会の好循環を築く〜」を発表

「日本文化政策研究会」設立／サブプライム問題により、世界の経済・金融に混乱／京都大学の山中伸弥教授、iPS細胞の作成に成功したと発表

「日本音楽芸術マネジメント学会」設立／「地方税法等の一部を改正する法律」公布、ふるさと納税制度導入／「新公益法人制度」施行

「日本ファンディング協会」設立／「附随現代芸術フェスティバル」混浴温泉世界」開始／「水と土の芸術祭」開始／文化庁「国立メディア芸術総合センター案」廃止／内閣官房参与に劇作家・演出家の平田オリザ氏就任／行政刷新会議が事業仕分けを実施

「3331 Arts Chiyoda」開始／「瀬戸内国際芸術祭」開始／「あいちトリエンナーレ」開始

東日本大震災が発生／企業メセナ協議会「GBFund-東日本大震災芸術・文化による復興支援ファンド」創設／履修会における美術品損傷補償に関する法律が施行(美術品補償制度)

東京スカイツリーが完成／文化芸術による「復興推進コンソーシアム」設立／劇場・音楽堂の活性化に関する法律が施行／「アーツカウンシル東京」設置

高士山が世界文化遺産に

「中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックス」開催／「国際交流基金アジアセンター」開設

1998年

「Japan Contemporary Dance Network(JCDN)」設立準備室活動開始(京都)／「滋賀県立ひわろホール」開始／佐川急便「佐川美術館」開始(滋賀)／キリンビール、「KPOキリンプラザ大阪」の運営において「メセナ普及賞」受賞／「京セラ美術館」開始(京都)／大阪市立近代美術館(仮称)基本計画策定／大阪市「大阪演劇祭」開始

1999年

毎日放送「大阪MBS劇場(現・シアターBRAVA!)」開始／「CAP HOUSE」開始(兵庫)／リッジクリエティブ「ART COMPLEX 1928」開始(京都)／ナニワ商会「心斎橋フォトギャラリー」開始(大阪)／関西電力「神戸らぶらぶミュージアム」開始(兵庫)／「大阪市文化振興事業実行委員会」発足

2000年

「大阪市立芸術創造館」開始／「京都芸術センター」開始／関西経済連合会「関西ミュージアム・メッセ2000」開催(大阪)／大阪21世紀協会「第1回舞台芸術・芸能見本市」開催(大阪)／村田製作所「清水三年坂美術館」開始(京都)／住友倉庫「海岸通ギャラリー」CASO」開始(大阪)／「奈良そごう美術館」開始／ウエストバワー「In+dependent theatre 1st」開始(大阪)／「京都服飾文化研究財団・フコール」KCI」ギャラリー」開始(京都)

2001年

「近鉄アート館」演劇公演終了(大阪)／京都造形芸術大学「京都芸術劇場 春秋座」開始／「奈良県立万葉文化館」開始／「藤山チルドレンミュージアム」開始(兵庫)／「NHK大阪ホール」開始／大阪市「大阪演劇祭」終了、大阪市「アーツアボリア事業」開始

2002年

「大阪・浪花座」閉館／「兵庫県立美術館」閉館／「大阪のど真ん中に小劇場を取り戻す会」設立／朝日放送、ザ・シンフォニーホールの運営と事業活動において「メセナ大賞」受賞(大阪)／「石田大成社ホール」開始(京都)／大阪府現代美術センターが府庁舎に移転、直営に／大阪市「アートのスペース創造事業(芸術創造館)」新世界アーツパーク事業」を含む7事業開始(大阪)／DANCEBOX、フェスティバルゲートに劇場開始(大阪)

2003年

「大阪府文化振興アクションプラン」策定／河合集進文化庁長官が「関西云気文化圏」構想を提唱／岡田文化財団「Paramita Museum」開始(三重)／「關町ミュージアム・スクエア(OMS)」開始(大阪)／「出光美術館・大阪」閉館／「県民文化活動チャレンジ企画制度」開始(滋賀)／歴史的建築物を活用した文化活動助成「大阪築地事業」創設／ART COMPLEX 1928が「エンジェルシステム」ロゴグランプリ受賞システム」導入(京都)／村松楽器「ムラマツリサイタルホール」開始(大阪)／京都東急ホテル「ギャラリーkazahana」オープン(京都)／文化庁「第1回国際文化フォーラム」開幕(大阪)／大阪市が「Breaker Project」大阪現代芸術祭」大阪現代演劇祭」開始

2004年

「近鉄劇場」近鉄小劇場」開始(大阪)／大阪市「精華小劇場」開始(大阪)／「国立国際美術館」大阪・中之島に移転開始／「大阪市立近代美術館(仮称)心斎橋展示室」開設／大阪市芸術文化振興条例」施行／「大阪市文化振興事業実行委員会」解散／京都市、芸術家への無利息つなぎ融資「助成金等内定者資金融資制度」創設(京都)／大阪市、大阪城ホール西倉庫に演劇空間「ウルトラマーケット」開始(大阪・北加賀屋で、造船所跡地という近代化産業遺産を拠点とし、30年にわたって新しい芸術の提示・考察・検証・記録を行うアートプロジェクト「NAMURA ART MEETING '04-'34」が始まる

2005年

「ミレニアムテイリング」が「そごう劇場」が「そごう心斎橋本店14階ギャラリー」開始(大阪)／「千島土地」クリエイティブセンター大阪(CCO)」開設／「兵庫県立芸術文化センター」開始「兵庫芸術文化センター管弦楽団」設立／「大阪現代芸術祭」大阪現代演劇祭&仮設劇場WA」終了、阪急阪神ホールディングスグループ「梅田芸術劇場」開始(大阪)

2006年

「声優市立美術館」がNPO法人声優ミュージアム・マネジメントに運営委託(兵庫)／天神橋筋商店連合会「天満天神繁昌亭」開始(大阪)／三菱UFJニコスが上方落語協会と連携し天満天神繁昌亭の運営資金として、利用額の一部を寄付するクレジットカードを発行／「特定非営利活動法人アートNPOリンク」発足(京都)／「アーツアボリア事業」終了

2007年

年間カード利用額の0.3%を文化に寄付するOMCクレジットカード「OSAKAメセナカード」発行／「大阪でアーツカウンシルをつくる会」設立／「大阪創造都市市民会議」設立／「佐川美術館 樂吉左衛門館」開始(滋賀)／「KPOキリンプラザ大阪」開始／「新世界アーツパーク事業」終了／「財団法人大阪都市協会」解散

2008年

京阪電気鉄道「アートエリアB」開始(大阪)／「旧旅館を改装しアーティスト向け宿泊施設「AIR大阪」開設／ビーインググループ「堂島リバーフォーラム」開始(大阪)／「此花アーツファーム構想」開始(大阪)

2009年

日本写真印刷「ニッシャ印刷文化財団」設立(京都)／京都市中央信用金庫「中信美術館」開始(京都)／大阪府・市・民間による「水都大阪2009」開催／「大阪府立青少年会館」閉館／「堂島リバービエンナーレ」開始(大阪)／「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ(KCV)構想」提唱／「千島土地、空き家」にアーティストやクリエイターを誘致する「空き家再生プロジェクト」開始／「近代化産業遺産を未来に生かす地域活性化実行委員会」が発足、区役所や地蔵住民も参画してアートを切り口とした地域の活性化に／千島土地「アヒルプロジェクト2009」実施、大阪活カグラランプリ2009「特別賞」を受賞

2010年

大阪市「アートインフオメーション&サポーターセンター中之島4117」開始(大阪)／大阪府「おおさかカンヴァス推進事業」開始／ウルトラマーケット」開始(大阪)／「KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭」開始／「六甲ミーツ・アート 芸術散歩」開始(兵庫)／「サントリーミュージアム(天保山)」閉館(大阪)

2011年

阪急電鉄、逸翁美術館と阪急学園池田文庫を合併し、「阪急文化財団」設立(大阪)／「千島土地「おおさか創造千島財団」設立／千島土地、KCV構想において「メセナ大賞」受賞／「財団法人大阪城ホール」解散、「精華小劇場」閉館(大阪)

2012年

「大阪市立現代美術館(仮称)心斎橋展示室」閉館／「橋尾忠則現代美術館」開始(兵庫)／「中之島4117」終了(大阪)／「大阪府立現代美術センター」閉館／「大阪府立立之子島文化芸術創造センター」開始／「オリックス劇場(旧・大阪厚生年金会館)」閉館／「関西地域振興財団」設立(大阪)／「北加賀屋みんなのうえん」開設

2013年

「大阪府市文化振興会議」共同設置／「大阪アーツカウンシル」始動／「イシハラホール」閉館(大阪)／朝日新聞社「フェスティバルホール」リニューアルオープン(大阪)

2014年

「アーツサポート関西(ASK)」設立(大阪)／近鉄不動産「あべのハルカス美術館」開始(大阪)、「近鉄アート館」再開(大阪)／「MASK (MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA)」一設公開スタート

2015年

「PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭」開催

2000年代

大阪の文化行政のめまぐるしい変遷

2000年以降、大阪府・市では相次いで文化に関するアクションプランが策定され、さまざまな切り口で文化政策が展開される。2002年に大阪市が開始した「新世界アーツパーク事業」は、文化的施設に「公設民営」という新しい運営方法が全国的に注目を集めた。しかしその後、大阪府・市の文化政策は変化を余儀なくされていく……。



Column

つくることのサポートから、つくる人のサポートへ



吉澤弥生

Yayoi Yoshizawa

株式会社女子文芸学部准教授、NPO 法人地域文化に関する情報とプロジェクトRecip」理事、NPO 法人アートNPOリンク理事。専門は芸術社会学、労働、政策、運動、地域の視座から現代芸術を研究。

「文化芸術立国」をうたう日本。だが「芸術文化大国」フランスと比べると、文化予算額で約5分の1、国家予算に占める割合では約10分の1。地方自治体予算を合わせても差は歴然

だ。そして関西、なかでも大阪の公的アートサポートはここ10数年大きな変化にさらされた。財政再建や首長の交替によっていくつもの事業が骨抜きとなったたり中断されたり、現場は混乱を極めた。

そんななか、民間の力が顕在化する。2004年「NAMURA ART MEETING '04-'34」の開始から、2011年おおさか創造千島財団設立への流れ、また2014年アーツサポート関西の設立、ただ振り返れば関西には近鉄小劇場、扇町ミュージアムスクエア、キリンプラザ大阪、サントリーミュージアム、アサヒビール大山

崎山荘美術館と、民間企業による芸術活動／アートサポートの水脈があった。また市民活動では、NPO法人アートNPOリンクが京都を拠点に活動を行い、2003年、全国アートNPOフォーラムを神戸で開催。2007年には大阪を拠点とするNPOを中心に「大阪でアーツカウンシルをつくる会」を開始(2013年「大阪でアーツカウンシルを考える会」に改称)。公共=官(お上)となりがちな日本において、関西では企業やNPO、市民の活動と行政が相互作用する形で、結果として公共的な創造の場をつくってきたのだ。

さて、フランスでは舞台・映像産業従事者の失業保障制度がある。イギリスの非営利団体はアーツカウンシルから人件費の助成を受ける。そしてアメリカのパブリックアート政策は雇用保障から始まった。現在の日本に目を転じると、先頃「文化芸術の進行に関する基本的な方針(第4次)」の中で初めて「雇用や産業の創出」という言葉が登場した。関西のアートサポートが今後アーティストやクリエイイターの雇用と生活の保障というアプローチで進むとしたら、相当画期的である。

北加賀屋を拠点にする365日

北加賀屋を中心に活動する2組のデザイン／建築設計事務所。昨年度、彼らが全国を飛び回った、日々の断片的な記録や思考の移り変わりをまとめました。

Co.to.hana の場合

2010年に西川亮が立ち上げた、社会や地域の課題解決に取り組むデザイン事務所、NPO法人。デザインがもつ「人に感動を与える力」、「ムーブメントを起こす力」、「人を幸せにする力」で社会問題や地域の課題解決を目指して活動を行っている。



2014年 4月 12日 土曜日
兵庫県猪名川町で進行している、障がい者交流啓発事業「イナワイ」のミーティング。この1年で何を成し遂げるか、これまでの活動をともにしてきたメンバーと密に話し合う。あと一歩で歯車がかみ合い、前進していけそう！ いまが踏ん張りどき。

2014年 6月 14日 土曜日
北加賀屋の空き地を使ってみんなで育てる共同農園「みんなのうえん」のケータリングをフランス大使館の関係者の方々に向けて行う。大阪でつくられているワインを勉強するなど試行錯誤を経て迎えた本日。喜んでもらえて本当に良かった！

2014年 7月 3日 木曜日
「イナワイ」で新展開。メンバーの知り合いで空いている農地を貸してくれる方が現れ、かねてから候補に挙がっていた「農」の活動が動き出した。栽培の管理など不安な面はあるものの、「まずはやってみよう！」ということで、動けるメンバーでサツマイモを植える。秋は焼き芋収穫祭。それまでに議論を深めていきたい。

2014年 7月 15日 火曜日
北加賀屋のクリエイターさんたちを集めて交流会を兼ねたBBQ！ たまにはこういう日も大事。

2014年 7月 20日 日曜日
劇団子供巨人の代表 益山貴司さんと振付師のミスターさんと一緒に、「みんなのうえん」の活動記録や農園での動きを取り入れた、オリジナルの体操「みんなのうえん体操」の開発WSを実施。無事に完成！

2014年 8月 31日 日曜日
「みんなのうえん」緑日を開催。農園の野菜を使ったかき氷や、ドリンクの販売を行う。地域の方にもたくさんお越しいただくことができた。



野菜をトッピングしたカレーやオリジナルかき氷など夏の楽しみをみんなで収穫して分かち合う

2014年 10月 24日 金曜日
自身の展覧会の設営中に事故で亡くなられた現代芸術家・國府理さんの追悼展を、北加賀屋「みんなのうえん」で開催。國府さんがつくってくださった「パラボリックファーム」をはじめ、ドローイングや高校時代の頃に描いたスケッチなど、貴重な作品展示を目の前にいろんな想いがめぐる。

2014年 11月 14日 金曜日
石巻の高校生が仕事を体験し図鑑をつくるWS、「仕事みち図鑑」の授業。初日ということで、これまでの人生を振り返り、それぞれ発表して、その場にいる人と共有。自分自身を振り返ることで、新たな発見が生まれた。

2014年 12月 9日 火曜日
コトハナが4周年を迎える。ク・ビレ邸で行われた記念パーティには、たくさんの方にお越しいただき、幸せな時間を過ごすことができた。まだまだ小さな団体だけど、想いをカタチにしていきたいよう、精進していきたい。



2014年 10月 19日 日曜日
毎年恒例のみんなのうえん祭！ お世話になっている農家さんやクリエイター、料理研究家さんが一堂に集まりマルシェやワークショップを実施。劇団子供巨人さんとつくった「みんなのうえん体操」のお披露目も大盛況だった。

2014年 12月 14日 日曜日
クリエイティブセンター神戸(KIITO)にて、「シンサイミライノハナ」のキックオフ会。震災の記憶を未来に伝え、人と人のつながりを育むためのこのプロジェクト。今年は阪神・淡路大震災から20年の区切りの年ということもあるので、多くの方と一緒にハナを咲かせられれば！

2015年 1月 17日 土曜日
震災から20年目、そしてコトハナが活動をはじめから5年目。これまでに会った方々と改めて出会える日でもあり、つながりの大切さを実感。活動を見た90歳のおばあちゃんが、これからお手伝いしてくれると言ってくれた。うれしい！



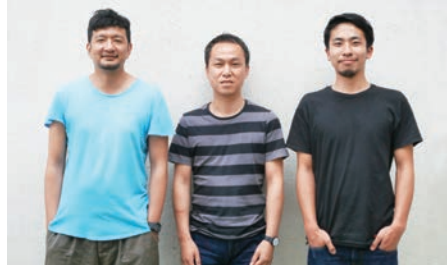
阪神・淡路大震災から20年、世界各地からいただいた、花の形のメッセージカードを展示

2015年 2月 1日 日曜日
「こどもたちがつくるドキドキパレンタイム大作戦」の準備1日目！ 神戸の子どもたちとクリエイターの先生や大学生が、一緒にデザインについて大人を幸せにするために、こっそり計画。あらためて、子どもたちの創造力やエネルギーはすごい！

北加賀屋「みんなのうえん」が、グッドライフアワード2015で「環境と食農」特別賞を受賞！ 大阪では、ケイオスカフェにて福祉について考えるイベント「大阪FUKUSHI祭り」が開催。福祉課題に取り組む先輩方の実践例を聞きながら、これからの福祉のカタチをみなさんと一緒に考える機会に。

dot architects の場合

家成俊勝、赤代武志により2004年、共同設立した建築事務所。大阪・北加賀屋を拠点に、土井亘を加えた3人体制で活動を行っている。建築設計・施工、アートプロジェクトの設計・什器制作など、さまざまな企画に関わる。



2014年 5月 23日 金曜日
コーポ北加賀屋全体会議。今後のことを話し合うけれど、基本的には何も決まらない……(笑)。

2014年 6月 18日 水曜日
構造家・満田衛資さんの研究所へ。小豆島に恒久設置されている、ビートたけし×ヤノベケンジ作品《ANGER from the Bottom》を記する「美井戸神社」について打ち合わせ。満田さんから神社自体を持ち上げようというアイデアが！ ケの時期は奥に佇む洞雲山が見え、ハレのときは屋根が持ち上がりて作品が見える設計。

2014年 6月 24日 火曜日
2年目となるGood Job!展の会場構成について、主要メンバーと打ち合わせ。今回は全国5カ所を巡回する。展示物や参加者の数も増加。「会場、増えましたね……」と身震い。

2014年 7月 4日 金曜日
家成が実行委員として関わっている「DESIGNEAST」。6年目の今年は、「DESIGNEAST 05 CAMP」と題して全国を旅してまわる。この日は静岡県浜松市の万年橋パークビル(立体駐車場)7F・8Fで行われた。「生きのびるための表現」というテーマで家成が鈴木一郎太さんと柳原照弘さんとトーク。

2014年 8月 2日 土曜日
11月に行われる、金沢21世紀美術館のプロジェクト「ジャパン・アークキテクトゥ 3.11以後の建築」ミーティング。市民ギャラリーを使ってワークインプログレスを行うのだが、担当学芸員の方から、金沢にある中学校全27校とワークショップを

してはどうかご提案いただく。美術館がこれまで深く踏み込めなかった領域である。メンバーの土井が各校をまわり、美術教育における課題問題をワークショップへと落とし込むことに。夜は赤代・土井で地元の居酒屋へ。カウンターで飲んでいたお姉さんと仲良くなる。2軒目のカラオケは赤代の十八番「涙そうそう」でめ。

2014年 8月 9日 土曜日
「瀬戸内国際芸術祭2013」で設計した、小豆島《Umaki Camp》を中心に行われる「馬木の寺子屋」。そのプログラムのひとつ「工学の時間」で建築家、左官職人・森田一弥さんがドーム型のかまど小屋を建設。が、あいにくの台風でドットは小豆島へ渡れず、森田さんは島に軟禁……。遅れて島入りしたら、見事な小屋が出来上がっていた。



《Umaki Camp》は、老若男女問わず誰もが「建てる」ことに参加できる建築として設計した。

2014年 8月 22日 金曜日
全国各地の建築家がUmaki Campに集まり、夕方から「小豆島建築ミーティング」を開催。家成と赤代も参加する。前回の反省をふまえて、グラスが空いたら自動でビールを注ぐシステム。そのため全員が酔っ払いながらも参加する。前回の反省をふまえて、グラスが空いたら自動でビールを注ぐシステム。そのため全員が酔っ払いながらも参加する。前回の反省をふまえて、グラスが空いたら自動でビールを注ぐシステム。そのため全員が酔っ払いながらも参加する。



2014年 10月 8日 水曜日
小豆島の美井戸神社竣工式。家成、3ヶ月ぶりにスーツを着用する。式には地元の方々で構成される「美井戸神社をつくる会」や町長、《ANGER from the Bottom》を制作したヤノベケンジさんほか、多くの方々に参列いただいた。

2014年 9月 12日 金曜日
千島土地の方々、graf服部滋樹さんと北加賀屋にある旧千島文化住宅の活用について話す。保存が解体か。船の廃材と思われる材木でつくられており、北加賀屋の発展と衰退の歴史が建物自体に刻まれていた。



雪荒ぶ「がた」。自然学習園やキャンプ場などの施設のほか、オニバスの自生池なども。

2014年 11月 18日 火曜日
旧千島文化住宅の1階にあった喫茶店のママへ聞き取りを行う。40〜50年前、造船所の働き手で溢れていた熱い時代。そうきんを干していたら風呂にもついていた。洗濯機をチェーンで止めないと盗まれるなど、当時の逸話を聞く。北加賀屋を拠点にしても、まだまだ知らないことが多い。



喫茶店の看板が目印。何度も増築され、いびつな形をしている。みんなのうえんが裏手に。

2014年 12月 6日 土曜日
「水と土の芸術祭」出展に向けて新潟入り、のはずが寒波で予定していた便が欠航。朝からレストランで3人そろってビールを飲む。出発が遅れること数時間、ようやく飛行機で新潟へ。「がた観測所」制作のため、まずは「がた」を見に行く。しかし一面の雪景色で現場がわからず……。

2015年 2月 8日 日曜日
1泊2日で新潟。「ネットワークふくしまがた」の車で「がた」を目指す。3人とも車酔いで青ざめながら到着。着いてすぐ地元の方からぶるぶるのクマのコラーゲンいただき食す。気分は最高潮に。地元の方々の飲み会に混じり、ふくしまがたについて話を聞く。水揚げされる雷魚、漁や干拓に使う「がた船」など見せていただいた。昔からつくられている船だが、材料は現代の建築資材を使うなど、見た目もおもしろい。その場で船づくり職人に弟子入りを志願。

2015年 3月 16日 月曜日
中之島アートエリアB1で行われる展示に向けて、粘菌「モジホコリ」を土井が培養。オープンデスクになったものの初任事は、同展示で設置する神棚組み立てと盛り塩の制作。

2015年 3月 28日 土曜日
旧千島文化住宅プロジェクト、1階で展開予定のカフェでカレーを販売したらどうかと思いつき、スパイスの「設計」を試みる。





表現者のためのお悩み相談室

表現活動を続けてゆくには、一筋縄ではいかない問題や課題と対面しなければなりません。表現者たちが抱えるお悩みを、スペシャリストにぶつけてみました。

お悩み1 著作権のボーダラインを教えてください！

作品が完成間際に迫ってきたけれど、パロディ元の著作権が心配で夜も眠れません。このまま完成して発表したら、訴えられる！？



お答えするのは……



水野 祐
Tasuku Mizuno

弁護士、シティライツ法律事務所代表、Arts and Law 代表理事、Creative Commons Japan 理事、その他 FabLab Japan Network などにも所属、Twitter @taaaaaaask

日本には、米国のフェアユース規定やフランスのパロディ規定のような、パロディ自体を許容する法律の規定がありません。したがって、パロディを適法に行うためには著作権法上の「引用」に該当する必要がある場合があります。ですが、この「引用」に関する裁判所の判断も近年揺れ動いており、明確ではありません。パロディを制作する際は、著作権法上の「引用」に該当するように、原作品のクレジットを表記することや引用範囲を必要最小限の範囲に留めるなど、慎重に行う必要があります。批評など、権利者にいたずらに損害を与える目的ではないことを説明することも一助になるでしょう。著作権法違反を避けるために、著作権が切れた作品や、著作権が発生しない部分だけを利用する手もあります。

こんな事例も参考になるかも……

Arts and Law
「バッタもん」撤去事件
<http://www.arts-law.org/>



岡本光博氏制作の「バッタもん」。『バッタもん』を、ルイ・ヴィトン社の抗議で撤去した事件のアドバイスなども行いました。

Arts and Lawでは、アーティストやクリエイターに対する無料相談を提供しています。2010年5月に神戸ファッション美術館が美術家・岡本光博氏による、高級ブランド5社のロゴマークや柄が入った生地で作成した立体作品「バッタもん」を、ルイ・ヴィトン社の抗議で撤去した事件のアドバイスなども行いました。

お悩み2 制作スペースはどこにある？

美大を卒業したら、アトリエがなくなってしまった！家のなかで制作していたら、間違えてうっかり絵筆でごはんをつかんでしまう始末……。



Illustration: Shingo Minamida

お答えするのは……



芦立 さやか
Sayaka Ashidate

東山アーティスト・プレイズメント・サービス(HAPS)事務局長。これまでは展覧会などの制作、コーディネートに関わる。2011年より現職。

最近は、改修を自由に加えて良い物件紹介をするWebサイトや、クリエイター向けの物件を集めている不動産屋さんなどが増えています。さらに多くの地方自治体がまちづくりを兼ねてアーティストに移住を促すような仕組みをつくっています。HAPSも京都市で活動するアーティストを支援するため2011年に発足しました。これまで、ビルの1フロアをシェアスタジオとして、町家をシェアハウス兼アトリエとして、数年空いていた物件を個人のアーティスト兼住まいとして、また展示会場として等、様々な活用をマッチングしてきました。アーティストはこうしたサービスを活用しつつ、独自のネットワークやアイデアをもとに、オリジナルな可能性を各々で切り開いていくのがベストだと思います。

こんな事例も参考になるかも……

東山アーティスト・プレイズメント・サービス
クリエイターと不動産のマッチング
<http://haps-kyoto.com/>



2014年にマッチングした京都市南区のビルの一部を改修したスタジオ「punto」

東山アーティスト・プレイズメント・サービスの主な活動として行っているのは、多くの芸大美大を有する京都でアーティストに制作スペースを提案するため、大家さんや不動産業者から寄せられた物件を紹介するマッチング事業。情報を集約し、双方の希望を聞きながら契約までをコーディネートしています。



地域コミュニティはいかにあるべきか

文・津田和俊

大阪のある料理屋で、温かい海鮮スープを注文した。テーブルの上に届いた器を覗き込むと、えびやトマトなどのいろいろな食材に混じって、いかの輪切りが浮かんでいる。かたわらには先が少し広めのスプーンが用意してあって、掏ってみるとうまくおさまる。「これは、いかのようにもなりません！」……いま数多くの議論や取り組みが、へ地域を足掛かりにして進められている。この概念は取り扱う範囲がいかようにもなるところがひとつの特徴である。小さな行政区画であれ、国の地方であれ、さらに国境を越えた領域であれ、まったくスケールが異なるものでありながら、どれもへ地域と呼ぶことができる。例えば、北加賀屋地域、関西地域、アジア地域というように。へ地域という部分に分けることで、いきなり全体を扱うのは手に負えないような物事も、足元から考えを始めることができる。その考えをスケールを自分たちの手で自在に絞ったり広げたりして設定することもできる。へ地域とはそんな概念である。

大阪のある料理屋で、温かい海鮮スープを注文した。テーブルの上に届いた器を覗き込むと、えびやトマトなどのいろいろな食材に混じって、いかの輪切りが浮かんでいる。かたわらには先が少し広めのスプーンが用意してあって、掏ってみるとうまくおさまる。「これは、いかのようにもなりません！」……いま数多くの議論や取り組みが、へ地域を足掛かりにして進められている。この概念は取り扱う範囲がいかようにもなるところがひとつの特徴である。小さな行政区画であれ、国の地方であれ、さらに国境を越えた領域であれ、まったくスケールが異なるものでありながら、どれもへ地域と呼ぶことができる。例えば、北加賀屋地域、関西地域、アジア地域というように。へ地域という部分に分けることで、いきなり全体を扱うのは手に負えないような物事も、足元から考えを始めることができる。その考えをスケールを自分たちの手で自在に絞ったり広げたりして設定することもできる。へ地域とはそんな概念である。

へ地域という概念は登場する。例えば、自分たちの住んでいるへ地域のことを何人かで同時に思い浮かべたとして、それをとらえるまなざしは往々にしてそれぞれ異なる。共有するものがありながら、視点が異なるからこそ、そこには対話の余地が生まれる。分業化や専門領域の細分化が行き過ぎることを「蝸壺化」とも呼ぶ。少し飛ぶが、これからは、ミツバチが異なる花に花粉をつけることで遺伝子の多様性が確保されていく「異花受粉」のように異分野を領域横断することによってバランスをとっていくことも大切であろう。つまり、たこに加えて、いかの視点を含むへコミュニティの大切さである。その際、言葉を交わすだけではなく一緒に何かしら「つくる」ことを通じた対話からはじめることが有効かもしれない。なぜなら「つくる」ということは、多様な視点から対象を分析し、生産的に議論し、そしてそれらを総合した落としどころを見つける必要が少なからずあるからである。

述べて。これは、自分にとって身近なところからいろいろなことをたぐり寄せるといふことと同時に、足元にある資源やランドスケープをあらためて見つめ直した上で自分たちの暮らしを直すというとも言える。そうして生まれる何かの総体としての文化の多様さを抱うためにも、まずは「つくる」ことを隣り合わせにしたへコミュニティをつくり、試行錯誤を繰り返す営みからはじめることが大事であろう。ファブラボ北加賀屋もそのひとつ。デジタルからアナログまで多様な工作機械をそなえてへ地域や自分に必要なものを「つくる」ことを通じて、これらの暮らしの具体像を描く実験工房である。本誌が創刊された二〇一二年、北加賀屋内に開設された。いまでは週末を中心に、エンジニア、デザイナー、美術家、研究者、実務家、主婦、学生など多様なメンバーが世代を越えて集まるへコミュニティとなっている。また、国内外のへ地域にある関連施設やファブラボ間のネットワークを活かして領域横断的な取り組みも行っている。二〇一四年からは中山間地域や離島地

域におけるへ地域開発としてファブラボの可能性を検討しはじめているが、世代を越えて集まるきっかけや、これまでつながらなかったへ地域の人間士をつなぐきっかけとなるへコミュニティの兆しが見えてきている。

これまでのへコミュニティのイメージを知りたければ、インターネットで画像検索すると早いかもしれない。すると人が手をつないでぐるっとひと廻りの輪になった「O」の字のイラストがたくさん出てくる。大抵はそんなイメージである。おそらく、これからのへコミュニティのあり方を考える上での手がかりは、誰でもともに居られる場にあるだろう。誰でも飛び込んでいけるように閉じきらずに少し開かれている。そこにはなるほど、いかの輪切りを少し噛みちぎったようなかたちをした「C」の字のへコミュニティがあるかもしれない。

津田和俊
一九八一年、岡山県新庄村生まれ。千葉大学大学院自然科学研究科多様性科学専攻修士、博士(工学)。現在、大阪大学創造工学センター助教、山口情報芸術センターYCAMコラボレーター。もの流れや循環に着目しながら、自然環境と人の関係性について考察している。二〇一〇年春頃からRealab Japan Networkに参加し、二〇一三年四月にファブラボ北加賀屋を共同開設。共著に「FABに何が可能か」など。

おおさか創造千島財団の助成 虎の巻

おおさか創造千島財団の助成公募にはじめて応募する人のため、
活動を終えて報告書を書くまでの道のりを紹介します。

助成申請までの準備

- 1 **まず、企画書を書いてみましょう！**
 - 「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「どのように」行うのか、「なぜ」いまその企画なのか、具体的に考え、言語化する
 - 活動が社会に対してどのような意義をもつのか、公共的な視点での記述が必要
- 2 **収支バランスを検証し、申請書に記入。**
 - 人と会って企画に対する意見を聞く、協力者を募る
 - 活動を実施するのに必要な情報をリサーチしてできる限り現実的な予算を立てる
 - 活動が目指すことを申請書内で効果的にアピール
- 3 **期日までに申請書類を郵送すること！**
 - 締め切りは例年1月上旬。プロフィールや活動実績、企画書など、添付資料の準備も忘れずに



創造活動実施までの準備

- 4 **助成の結果発表を待ちましょう！**
 - 採択されていたら、財団との面談で助成交付の詳細を確認
 - NGの場合もその分工夫して実施につなげましょう
- 5 **活動に向けた準備、広報はじっくりと。**
 - チラシに財団のロゴマーク掲載で助成金交付可能に
 - 実施内容を調整し、無理のない予算を組み直す。助成申請時から内容に変更がある場合は、財団にも報告すること
 - チラシや招待状など郵送、SNSで告知も行う



創造活動の実施

- 6 **さあ本番、楽しみましょう！**
 - 撮影・録音を行い、かかった費用なども記録
- 7 **忘れないうちに、活動報告書をしっかり作成。**
 - 活動に対して、客観的な考察・反省点を出す

